

# 上映映画解説

1954, 5-6

国立近代美術館 ファイルム ライブラリー



No. 21

## 路上の靈魂

### 特別映画鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、その事業の一部として、歴史的価値のある芸術性豊かな映画を鑑賞し研究する会を開催しております。今回はその第一〇回として、大正期日本映画における先駆的な作品「路上の靈魂」をとり上げました。

「路上の靈魂」は、新劇界で活躍した小山内薫氏が松竹キネマ研究所を指揮して製作したもので、大正一〇(一九二一)年四月八日、第一松竹館で封切され、多大の反響を呼び起した作品です。現在から見ても可成り驚異の強いものですが、この映画の関係者の中から、日本映画界に指導的役割を果たした人々を多く輩出し、その価値は日本映画史上高く評価されています。

### 路上の靈魂

八巻

大正一〇年松竹キネマ研究所作品

総指揮……………小山内 薫

監督……………村田 実

脚色(シユミットボン「街の子」及びマクシム・ゴリキー「夜の宿」より)

……………牛原 虚彦

……………水谷文次郎

……………溝口三郎

……………島津保次郎

鶴吉——前科者……………南 光明氏  
龜三——前科者……………葛 村 繁氏  
或貴族の令嬢……………英 百合子嬢  
八木節の姉……………東 栄子嬢

この映画について封切當時のキネマ旬報第六五号(一九二一年五月一日号)は次のように記述しています。

「略筋、吾々は人類全体に対して憐れみの心を持たなくては行けない。例へばキリストは人類全体を憐れみ給ふた。そして吾々にもそうせよと仰せられた。人を憐れむには時がある。その時をはずさない様にすることが好い。(ゴオリキー)」

以上の意を、一つは、都に憧れて家を捨て、出でた息子が窮迫に行詰つて親の許へ帰つて来た時、此を許し得なかつた親の悲しみ、他方は、二人の前科者を許したある家の喜び、此の二つに於て対照したものである。」

なお、近藤伊与吉氏はキネマ旬報同号で、「帰山教正氏によつて火蓋を切られた映画劇製作の運動は、日本在來の新派劇に反抗して、曲りなりに純粋な映画劇の型式の上に映画劇を作らんとした時代であり、歴史的に分類したら破壊時代と名付け得る。これに続く創造の期、建築時代は當にこの『路上の靈魂』を以て開始するものであると信ずる」と述べ、「この時機の先頭に立つて目覚ましい進軍を続けて、第二の時代に向つた歴史的な名譽を荷つたものは『路上の靈魂』である」とこの映画の意義を高く評価し、「自分は此劇にあらゆる讃辭を呈するものである」と絶賛しています。が、現在から見て、この「路上の靈魂」の価値付けは、映画史的に正當なものと言えましよう。(引用文の仮名づかいは原文のまま)

### 松竹キネマ研究所のこと

牛原 虚彦

大正九年二月(一九二〇年)松竹キネマ合名社が創立されると同時に、歌舞伎座に、松竹キネマ俳優学校が、新しい映画人の養成を目的として開校された。

校長は小山内薫先生、講師は松井松葉(松翁)久米正雄、山田耕作(笹作)東健而、齊藤佳三、人見直善、市川左升、アンナ・スラヴィナの諸氏であつた。この俳優学校は同年五月、蒲田撮影所が新設されるとともにその轄内に移転した。生徒には伊藤大輔、鈴木伝明、植花儀太郎(岡田宗太郎)、奈良真養、鈴木光(南光明)、淵元智、杉沢長十、大塚正雄、佐藤武雄、沢村幸子、東栄子、松下南枝子、中村よし子、山路又香、松島衣子、山田恵子などの諸氏がいた。

蒲田では、小山内先生は、撮影所総監督を兼任されていた。そして、その指導の下に一つの「プロダクション」があつた。先生は、総監督として『奉仕の誓い』(村田実監督、関根達彦、諸口十九、岩田祐吉主演)『光に立つ女』(村田実監督、エカテリイナ・スラヴィナ、根津新主演)の二作品をシュウパヴァイズされた。

當時、蒲田撮影所には監督として森妻賀古残夢、田村宇一郎、藤井増彌、川口春舟、新に、リウッドから迎えられた小谷ヘンリー(兼カメラマン)田中エドワードの諸氏がいた。が、不幸にして、すべてに革新的な小山内先生と當時の熟練監督諸氏とは互に相容れず、九月には大谷竹次郎社長直屬の松竹キネマ研究所が本郷座(本郷区春木町)本家茶屋に分離新設された。その構成メンバーは、所長小山内先生の下に、旧小山内プロダクションのスタッフと六ヶ月の基礎訓練を終つた俳優学校の卒業生たちであつた。前者には、村田実、牛原虚彦、島津保次郎、葛見丈夫(監督部)北村小松(脚本部)佐藤夏樹、土橋慶三、磯部薫(経営部)、水谷文次郎(撮影部)、根津新、東屋三郎(俳優部)、溝口三郎、山本金三郎、山下徳松(装置美術部)少し遅れて参加したものに小田浜太郎、佐々木恒次郎(啓祐)、鈴木博、白井茂(撮影部)、英百合子、伊達龍子、春野恵美奈(俳優部)の諸氏があり、後者は俳優学校出身の殆んど全部であつたが、當時既にシナリオ作家として独自の境地を開拓しつゝあつた伊藤大輔氏と俳優の奈良真養氏は蒲田に残つた。

この松竹キネマ研究所の第一回作品が『路上の靈魂』

である。シュミットボンの『巷の子』とゴーストキイの『どん底』（夜の宿）から材料を得て牛原虎彦が脚色し、総監督小山内先生、監督村田実、撮影水谷文次郎、小田浜太郎、美術溝口三郎、小道具山下徳松、字幕押山保明のスタッフ、出演者は東郷是也（鈴木伝明）、南光明、岡田宗太郎、葛村繁（葛見丈夫）、佐藤武雄、杉沢長十、大塚正雄、英百合子、伊達龍子、東条子、松島衣子、中村よし子、山路文香などの他に小山内先生、村田実、牛原虎彦などまでが主要な人物に扮し、研究所の殆んど全員がビットに出演した。

『これからわれわれが、ほんとうの映画をこさえるのだ。いままでの日本映画から教わるものは何にもない。われわれの力で何もかも新しくこさえ上げるのだ。僕も俳優をやる。みんなつゞけ！』

これが小山内先生のかげ声だった。だから俳優たちもカメラを担ぎ、反射板を運び、小道具を手伝った。たとえは島津保次郎氏は、まだ電気照明の幼稚だったこの頃、反射板の使用や人工光線の利用に積極的にとりこんだ。この映画のクレディットに光線という奇異なタイトルが出るのは、そのためである。その上、島津氏は四つの大型写真機を軽井沢の山坂越えて運びながらステルの撮影に専念した『路上の靈魂』の四つ切密着のステルは現在のステルに比較しても、ひげをとらぬほど優秀な出来であるが、これは島津氏の努力のたまものであった。誰もが苦勞をいとわず、うって一丸となった。小山内先生が父親役に、村田氏が少年太郎に、牛原が老執事に扮して出演したのも身をもつて示された先生の指導精神の現われであった。この教訓は、今にいたつても貴重なものといわれねばならぬ。

軽井沢のロケーションは、この年十一月からはじまったが、年末近く小山内先生がロケーション先で卒倒、危篤に陥られた。現場は軽井沢から草津へ向けて山奥の炭焼場であったが、この日雪まじりの烈風を冒して無蓋貨車にのり、凍てつく寒さに互に抱き合い乍ら大声に歌をどなりあつて山を越えたことが直接の原因であった。先生を漸く旧軽井沢の萬松軒という宿屋までお連れしても避暑地の冬、一人の医者も居ず、やむな

くマンロウさんという英国人の老医師に懇願して治療に當ってもらう始末であった。この独身主義の風変りの英国人は小山内先生の御言葉では、尊敬すべき哲学者であつたそうで、漸く小康を得られた頃の先生は、この哲学者と人生を文学を演劇を語つていられたことを記憶している。それにしても小山内先生が四十八歳の若さでこの世を去られた遠因が、この山映での心臓発作に関連あるのではないかと思うと先駆者として先生が日本映画の新しい出発にはらわれた犠牲の大きさに門下の私たちの心は今もつて激しく疼く。

三十四年ぶりに『路上の靈魂』の編集を担当して、各画面を拾い上げるとに今はほき小山内先生、村田実、島津保次郎、葛見丈夫、岡田宗太郎、小田浜太郎諸氏の生前の姿に接して私は全く胸せまるばかりであった。

小山内先生御病臥中、撮影は一時中絶、その間、私達は奈良の文化映画を製作したりした。『路上の靈魂』の東京封切は大正十年四月八日、赤坂帝國館（第一松竹館）であった。つゞいて小山内先生は関西各地の封切に講演旅行をつゞけられた。説明を担当していたのは、ずつと徳川夢声氏であった。

松竹キネマ研究所は、つゞいて『山暮るゝ』（北村小松脚本、牛原監督、小田浜太郎撮影、根津新、沢村春子、南光明、春野恵美奈主演）『君よ知らずや』（村田実監督、水谷文次郎撮影、アンナ・パブロワ、根津新主演）、短編喜劇『お前だ！お前だ！』を製作、牛原の監督脚本で『浅草』の準備中、大正十年六月、小山内先生の名で解散された。その理由を詳らかにする紙面の余裕はないが、牛原が、蒲田撮影所内に設けられた松竹キネマ研究部の部長という名儀で旧研究所員とともに蒲田に復帰した。小山内先生は退かれ、村田実、根津新、東屋三郎、溝口三郎、山下徳松、春野恵美奈の諸氏は残念乍ら袂をわかつて去つた。然し、小山内先生を中心とする『小山内薫とその子分の会』は先生門下の映画人の集りとして長くつゞいた。

終りに臨んで三十数年前の古いネガティヴのプリント其他の困難なる作業に犠牲的に奉仕していただいた松竹の関係各位に深甚なる謝意を表したい。